



紙のバチがあたる

林真理子

「林さんのご実家って、本屋さんだったんでしょ？」

お年を召しているが、大層美しく高名な女優さんが、会うなりそうおっしゃった。

「私はね、本屋の娘に生まれるのが夢だったんですよ。毎日日本を読んで暮らさんだって……」

こう言ってくださるのは嬉しいが、本屋をかなり美化している。都会の大書店ならともかく、田舎の吹けば飛ぶような本屋である。毎日返品の手と格闘しているうち、母の腰はすっかり曲がってしまったほどだ。

単行本よりも雑誌の方がずっと売れるので、付録ばさみも大変であった。子どもの学習雑誌は、細かい付録が六つぐらいつく。

「前もってちゃんと数えておくんだよ。ちゃんと足りてるかよく見て」

と母に注意されるのであるが、当時からいい加減な性格の私は実行したことがない。よっていつも足りなくなり、最初からやり直しになる。「謎の探偵めがね」といった付録は、薄いビニールの袋に入っていて、それがぴつちりと重なっている。だからいつも数が足りなくなり、どれほどいらいらしたことだろう。

紙は冷たい。冬だと触れてひやりとする。そしてヘタをすると、紙で手を切ってしまうのだ。

そして紙は高貴である。つくづくそう思う。私は皆さんが想像するように、本屋の娘の特権として、よく売り物の本を読んだ。手を洗い、注意深くページをめくっていてもどうだろう、新刊は読んだページと読まないページとで、全く色が違ってくる。二分されてしまう。誰かの手が触れただけで、紙は変色するのだ……。

このように紙と接してきた私が、物書きになって原稿用紙を使うのはあたり前の話である。「今どきパソコンを使わない作家っていませんか」



はやし・まりこ●作家。山梨県生まれ。日本大学芸術学部卒。コピーライターとして活躍。1982年エッセイ集「ルンルンを買ってうちに帰ろう」がベストセラーとなる。86年「最終便に間に合えば」「京都まで」で第94回直木賞を受賞。95年「白連れんれん」で第8回柴田錬三郎賞、98年に「みんなの秘密」で第32回吉川英治文学賞を受賞。現代小説、歴史小説、エッセイと幅広い作風で活躍している。

自宅にて

とこの頃驚かれるが、原稿用紙を使う作家は案外多い。ミステリーやノンフィクションを書く作家は、百パーセントパソコンを開くが、私のように恋愛小説を書く作家の中に、原稿用紙派はまだまだいるのだ。

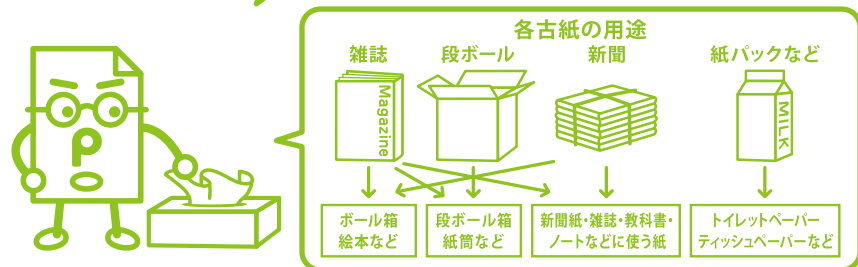
頭の中で孵化しかかったものを、とりにあえず原稿用紙にぶつつけてみる。すると不思議なことに、ペンが勝手に動いていく時間があるのだ。手書き派の作家は、息を密めてペンを持ち、この時を待っているのだ。もつとも私は、待っている間、原稿用紙の端っこに落書きをする。女の子だったり、小犬だったりするのだが、それは五歳の時からまるで変わっていないではないか。一度、私の原稿用紙がアップで撮影され、そこにお人形さんやマリコという文字やらがあって皆に笑われた。

思えば幼ない頃から、形を変えて紙はずっと私を食べさせてくれているのである。商売道具に落書きをしたりするというのは、いつかバチがあたるのではなからうか。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレトペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていきます。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、またどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトを覗いてください。

<http://kamitsubu.com/>

今回は3月3日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Shiro Miyake